

報告しています。

社会貢献だから非効率でいいということにはならない。むしろ、持続的な社会貢献は営利企業より効率的であるべきだし、説明責任も果たさなければならぬ、というのが私の持論です。

K…仮にビジネスの世界に飽き飽きしていても、自分の時間をすべて社会貢献に捧げたいと考える人はほとんどいませんね。その点はRtRの活動の障害にはならなかったのですか。

W…むしろ、RtRが成長できたのは、そういう障害があったからだと考えています。現実を考えれば、おっしゃるように誰もが自分の仕事を捨ててフルタイムで社会貢献に従事できるわけではない。だからこそ、ボランティアによる寄附金集めという拠点（チャプター）が重要なのです。

東京、シドニー、シンガポール、香港、ニューヨーク、ロンドンといった大都市の企業幹部には「仕事を辞めないでください」と言います。会社で稼ぎ、会社の電話を使い、会社の人脈を保ったまま、あなたの時間の5%、あるいは10%をRtRのためにいただけないでしょうか、と。

K…なるほど、5%なら誰にでもできる。

W…最初は5%から始めます。RtRの活動がいいと思えば、それが10%になり、20%になっていきます。

K…あなた自身はなぜ100%の時間をRtRに捧げようと決意したのですか。

W…自分の時間の90%をマイクロソフトに使い、残り10%でRtRをやるという選択は私にはなかった。そうしていれば、RtRはいつまでも小規模のままだったでしょう。自分の時間を100%使えば、RtRには世界を変えられる可能性だつてある。「大きく行け、さもなければ家に帰れ」ということです。

K…しかし、ジョン・ウッドは一人しかない。組織が大きくなるほど、ご自身の目が行き届かなくなるもどかしさを感じるのではありませんか。

W…途上国における支援活動は、現地のディレクターに決定権限を委譲しています。ネパールについてはネパール人、ベトナムについてはベトナム人が最もよく事情を理解している。どの村と協力するか、どこに学校を建設するか、どこに図書館を開設するか。各国のディレクターがすべてを決める。営利企業でいえばCEOのような存在ですね。

二〇〇八年、チャリティ・ブック・プログラム「Chabo!」が始まった。左下のロゴマークが付いている本を買くと、著者印税の20%が自動的に寄附され、特定非営利活動法人・JENを通じて途上国支援に充てられる仕組みだ。読者は本を買うだけで間接的に途上国支援にかかわることができる。

このユニークな仕組みを考え、実行に移したのが勝間和代さん。知り合いの著者に自ら印税寄附を依頼し、一六カ国で一三〇万人を支援してきた実績を有するJENの協力を取り付けた。このあたりの熱意、行動力は、ルーム・トゥ・リー

勝間和代が始めた「草の根社会貢献」



ドのジョン・ウッド氏と共通するところがあって、対談中も「Chabo!」の仕組みが話題に上った。

活動開始から一年あまりで寄附金総額は六七八四万三七〇円（〇九年一月三十一日）。このお金はすでにスーダンの井戸、トイレやスリランカのコミュニティホール建設等に使われている。ウッド氏は寄附金の使い途に関する説明責任の重要性を強調しているが、Chabo!では「Chablog!」を通じて活動実績を報告。集まったお金の総額等をガラス張りになっている（<http://www.jen-ngo.org/chabo/chablog/>）。

Column

私は各国の「CEO」に言うてゐるんです。コミュニティーにおける支援活動は君たちの仕事で、そのために必要な資金を集めてくるのが私の仕事だと。君たちは子どもたちのために働き、私は君たちのために働くのだと。

K…逆ピラミッド型ですね。子どもたちが頂点にいて、あなたは最底辺にいます。

W…そのとおりです。

K…ずっと以前から、たとえばユニセフのような組織は途上国支援に取り組んでいるわけですが、スケールメリットは十分ではありません

せん。国連もミレニアム開発目標を設定しましたが、そのスピードは非常に遅い。こうした各国政府が関与する途上国支援活動については、どうお考えですか。

W…私はミレニアム開発目標自体は強力に支持しています。ただし、どこの国の政府も数十億ドルもの巨額援助を文字どおり政府から政府に移転させるだけで、これらの資金が実際に必要とする人びとに行き渡っていない。

政府援助額の5%でもいいから、実績のある社会起業家に与えたほうが効率的な社会貢献を実現でき



K.S.

るはずですが。でも、「ジョン、RtRはいい仕事をしてるね。もっと手伝えることはないかい」と声をかけてくれる政府はまったくないですね。

途上国支援予算がGDPの〇・二%だろうと〇・七%だろうとたいた問題ではありません。資金が適切に再配分されるシステムが崩壊しているところが問題なのです。RtRにはビジネスモデルはあるけれど、資金が足りない。

政府には資金はあるけれど、ビジネスモデルがない。この現実を調和させるシステム再構築が必要だと痛感しますね。

一人ひとりの「行動」が世界を変える力になる

K..最後に読者へのメッセージをひと言いただけですか。

W..「ああ、RtRっていいことやってるね」と冷蔵庫からビールを出してきて、次の記事を読む。

これではダメなのです。ソファから立ち上がり、PCに向かって、あるいは誰かに電話して、RtRを経由して行動せよ、と。とにかく行動してほしい。

私たちは日本の企業リーダーの関与を必要としています。リソースと人脈があれば、誰でもRtRにおいて果たすことのできる役割がある。

ですから、私たちのウェブサイ
ト (www.roomtoread.jp) を訪

れて、実際に行動を起こしてほしいのです。

「Bears for Books」という取り組みがあります。これは日本で始めたもので、バーのオーナーと協力してドリンク一杯ごとに一〇〇円をRtRに寄附するんです。友人と集まってビール一杯飲めば、子ども向けの本一冊になる。誰にでもできることから始めればいいのです。

K..日本でもワーキングプア問題が深刻になっていて、アフリカの子どもたちよりも日本の若者を助けるべきではないのか、という論調もあります。

W..そうおっしゃる方がたが、実際に日本人のために行動していれば、すばらしいことだし、私も耳を傾けるでしょうね。しかし、そうおっしゃる方がたの多くが実際にはなんの行動もしていない。行動を伴わない批判に耳を傾ける時間はありません。

私はとにかく誰に対しても「参加してみろ」と挑発します。人類の最も幸福な五%に含まれている私たちが、最も貧しい五%、一〇%、二〇%の人びとに手を差し伸べることで世界は変わる。もし興味があれば、私に直接メールをください (wood@roomtoread.org)。待っています!